

カントの「想像力」について  
 務臺 理作君  
 三木君は伯林に當分滞在される由、西田、朝永、波多野教授も出席された。

### 教育研究會例會

五月四日午後六時半より學生集會場に於て開會、文學士高橋俊乘君が「平安朝の教育」と題し約二時半に亘りて講演せらる。

講演の内容は主として氏の創意にかゝるもののみであつた。就中當時の大學が從來の日本教育史に於て官吏養成機關と解されてゐるのは誤りて「詩文に長けた學者の塾を政府が保護せるものなり」と斷し、菅家遺誡中にある和魂漢才なる語が何れの教育史にも誤解されて掲載されたり等と引證該博論理明晰に論じ去つたのは痛快な氣がした。實に近來稀れな究理的氣分に充ちた講演であつた。

### 倫理學會例會

五月二十六日午後六時から學生集會場で左の講演を開いた。

Ayres, The Nature of Relationships between Ethics and Economics.  
 藤井 教授

### 社會學會

五月十八日(木)午後七時より學生集會場で例會を開き次の講演が行はれた。

漢字に現れたる道德と社會の關係  
 文學士 白井 賴吉君

## 新著紹介

メーリス

### 宗教哲學緒論

征矢野見雄譯

嘗てある友人から面白い書物だから讀んで見よと紹介せられて一小冊子を読んだ。そして明快流麗な文章と著者の藝術的官能の豊かさを思はせる様な叙述と譬喩に魅せられた、それがこの譯書の原著であつた。

著者の若々しい情熱を盛た美しい文藻がこの書全體を麗ばしく織りなしてゐる。或はローマのミケランセロやラファエルの傑作の讚美に於て或は恋や死の叙述に於て更には神祕意識の説明に於て吾等は稀に見る美はしい表現に出會ふ。そして又此書全體を通じて藝術が常に宗教の美はしい双生兒として示されてゐる。此點から此書は我々をしてシュライエルマツヘルの宗教論を想ひ起させるのであるが、兩者の氣分は異つてゐる。前者は宗教を藝術に近付ける事によつて宗教の特異性を明にせんとし後者は藝術から區別する事によつて宗教の特異性をより微妙に理會せんと努める様に見える。

併し乍ら著者の文學的才能の豊富は却ていくらか此書の哲學的價値を減損した様である。此書から得られる觀念は決して明確だとは云ひ得ない。此の事の來由は單に此書の表限の仕方によるのみ求めるべきではない。當の對象である宗教意識其物の非合理的であ

る事にも起因するであらう。(殊に著者の如き態度に於ては)。然しそれよりも大きな理由は此書が餘りに多くの思想動機を包まうとする事にある。宗教哲學に於て問題となるべきあらゆる要素が取り入れ乍ら紙数はそれ等の問題の徹底的解決を許さない。こゝにこの書の明確性を缺く根本原因があると思ふ、著者の序文によれば、將來更に組織的な大著述を出す筈であつて此書はその單なる結構又は緒論である。吾等は此書を非難する事を控へなければならぬ。そして又序文によれば此書の重なる關心は宗教的現象が他の文化現象と異なる處の、その獨特な意味の鮮明確立に向けられてゐる。吾等は確かに此書に於て宗教現象を他の文化現象から明に區別する事を教へられた。宗教生活從つて宗教價値を他の文化生活文化價値から導き出さうとする試み、或は宗教生活、宗教價値に異常に高き位置を興へんとして却つて諸文化生活、文化價値に滲入させて仕舞はうとする企てから吾人は一度限り救はれた事を感じる。

従つて此書の特徴をなす部分は第七章及第八章である。こゝでは宗教的體驗及宗教的天才に就て著者の敏感な分析が施されてゐる。宗教意識の要素としての憧憬感情、依歸感情、安全感の美はしき叙述、宗教生活の最高形式としての神秘的感情の微妙な説明は著者ならではと思はれる。神秘的體驗を有する人のみが宗教的天才である。宗教的の人と宗教的天才とは區別しなければならぬ。藝術的天才と同じ様に宗教的天才は宗教價値を創造する。宗教的天才は異常な神秘家にのみ限られる。宗教現象の特殊性を明にする爲に宗教的體驗を天才に限る事は必要な事である。

宗教の妥當の問題に就ての著者の意見は稍々明確でない、宗教の妥當とは宗教の對象即「神的なるもの」の超越的實在性である。他の文化哲學に於ては不許不の理念又は超越的價値に止まる事が出来るが宗教哲學に於ては價値の超越的實在性が問題となる。著者によれば宗教生活は其自身根本的現象であつて他の現象へ還元する事も、他の凡ての文化現象の綜合統一である事も出来ない。又宗教の對象たる理念は憧憬の満足又は實現であつて他の文化價値の様に吾人に對して要求として現はれるものでない。だから著者の立場からは嚴然たる意味の妥當の證明は成立し得ない。著者は故に、證明といふよりは寧ろ説明といふ程のものを、歴史が全體として次第に高き價値の實現へさ向ふといふ事實に於て、又歴史の中に現はる、偉大な個人の創造力に於て、或は人類が、絶對的否定である死を超えての生命の存在を考へ得るといふ事實に於て求めた。かゝる仕方の一つとして彼は凡ゆる文化生活の根柢に於て「神的なるもの」に關係するといふ事を示した。

宗教はそれを他の文化現象に取り入れて仕舞ふとする暴力からは防がなければならないが、然し又自ら謙遜でなければならぬ。他の諸文化の綜合者統一者を以て任じてはならない。現代は宗教を輕蔑し、又は他の文化領域へ從屬せしめやうとする人は少からう。然し宗教が次第に人の關心を惹くにつれて宗教を以て漠然たる諸文化の統體に上げやうと考へる人々は少くない。此書が著はされそして譯せられた事は後者の意味で重大な意義があると思ふ。

最後に翻譯に就て云ふなら、譯者が此書を譯するに就て、注意

を拂はれた事は、直譯に依つて意味の通じない處には註を入れ、個有名詞には年代を加へてある處に現はれてゐる。そうして原著の氣分の可成に現はれてゐる。併し乍ら數ヶ所、誤解の爲に又は譯語の正鵠を得なかつた爲に原意を謬る様な箇所があつた。過誤は人間の的である。改版に際して、譯者の才を惜しまれなかつたなら幸此上もない。(東京大村書店發行、佐保田鶴治)

## 寄贈書籍雜誌

エルンスト・ホフマン原著

現代思潮より見たる佛教の根本思想 友松 圓諦譯補  
東京 新光社發行

原始佛教思想論 文學博士 木村泰賢著  
東京 丙午出版社發行

華嚴哲學小論攷 文學士 土田杏村著  
京都内外出版會社發行

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、日華公論、  
教育研究、内外教育評論、學校教育、教育、教育學衛界、教育時  
論、教育界、精神運動、國際聯盟、文化運動、藥王樹、三田文學、  
佛教研究